

ショパン原稿 2017年4月号 深井尚子

今月は、美しい響きについて考えてみましょう。現代のピアノは、たいへん大きくなり、弦の張力は、20 tにもなり、88の鍵盤に対して、230本の弦が張られています。その楽器を豊かに美しく鳴らすことは、意外と難しいことです。コンクール審査や大学の定期実技試験などで、フルコンサートグランドピアノでの演奏を聴く機会が多いのですが、楽器を十分に鳴らせる演奏者は、案外、少ないのです。「豊かで美しい響き」の定義も難しいのですが、私の6年に渡るウィーン留学時代にウィーンの先生たちが求めた響きは、音量ではなく、音の質の豊かさでした。「豊かで美しい響き」について、私の長年の研究や実践、また、大学での学生たちとの授業からわかることは、「タッチ」は、打鍵のスピードに深い関わりがあるということです。つまり、fでもpでも、指先や腕の力ではなく、各部位の重さを上手にコントロールすることで、変化をつけているのです。そのためには、まず、指先と第1関節がしっかりしていなければなりません。身体が痩せていたり、細い指であっても、「タッチ」の瞬間のスピードと打鍵直後の出力と脱力ができていれば、「豊かで美しい響き」を得ることができます。

今回の譜例は、ベートーヴェンのピアノソナタ作品106「ハンマークラヴィーア」とシューマンの謝肉祭作品9の冒頭です。両曲とも冒頭に曲のイメージが表れる、豊かなffが指示されています。ベートーヴェンの場合、ffの部分にはペダルを4小節踏み続けるよう書かれていて、いかに豊かに力強く印象づけたいかがわかりますね。また、シューマンも30分を超える長い楽曲の始まりを告げるffです。さらに「前口上」という題名もつけられており、「さあ、これから謝肉祭が始まりますよ！」といううきうきした気持ちが表れています。左右で6つ～8つの音が並ぶ和音を豊かに響かせ、楽器を十分に鳴らすにはどうしたらいいでしょうか。先に話した、「タッチ」についてはまた別の機会に説明したいと思いますが、今回アドバイスしたいのは、姿勢です。まず、椅子の高さを鍵盤と腕が平行になるように調整し、ピアノとの距離も腕が曲がらないような位置に決めます。次に、腕が自由に上下できるよう、肩を緊張させず、背筋と腹筋を意識して、身体全体が筒になっていることをイメージします。腹筋だけを意識すると姿勢は少し後ろに向き、背筋だけを意識すると前かがみになります。しかし、両方の筋肉を意識することで、安定した姿勢を保つことができます。その姿勢ができたら、腕を自然に持ち上げ、打鍵の瞬間に一気に出力し、打鍵後は速やかに脱力することで、「豊かで美しい響き」が得られる1つの条件が整います。他にも、指先の安定、手首の扱いなど、さらにさまざまな条件がありますが、紙面がつかまりました。続きは、次回にお話しましょう。